

ラグビーマガジン

オールブラックス来日特集

夢のチームの魅力を探る

フタニードクターカレッジの語る



好評連載

北島忠治86年の軌跡
八幡山春秋

強化委員長・日比野弘氏に聞く
日本代表の選考には
全責任を持って臨みたい

別冊付録

'87 SUMMER CAMP
GUIDE BOOK

1987

9

別冊付録共 630円
特別定価

ベースボール・マガジン社

D・カーク

①

● 誰も気付かなかったヒザの故障

第1回ワールドカップで大活躍し、世界にその名をとどろかしたジョン・カーワン。彼が7月11日の土曜日、オークランドのドメインにある競技場で行なわれたマリスタ・クラブの試合に出場した。チーム関係者やリザーブの選手を含めても観戦者は50人にも満たないような、とるに足らない試合に、わずか3週間前にあのイーテンパークで5万人のファンを熱狂させた男が出場したのだ。もちろん、彼の出場などという話はどこにも発表されてはいなかった。

「グラウンドは泥の海だし、走るに走れない。足をとられやしないかとヒヤヒヤだったんだ。できることなら、こんなところじゃ2度とやりたくないね」と、カーワンは言っていた。ではなぜ、こんな試合に出場したのか。

じつは、ワールドカップの決勝戦で痛めたヒザの調子を試すのが、彼の目的だった。このヒザの故障は、ワールドカップの準決勝ウェールズ戦（プリズベンのバリモア競技場）で、エバンスのあわやトライかという突進を、ゴール1筋手前で倒したときに痛めたものだった。

「ウェールズ戦のあと、ヒザの筋は硬くなっちゃっし、その後1週間といたものは、ヒザの様子ばかりうかがっていたんだ」

集中物理療法でなんとか決勝のフランス戦には出場できたが、あの柔

らかな芝の上でさえ、刺すような痛みを感じていた。

「正直なところ、もしグラウンドがあんなに深い芝でなかったら、きっと途中で交替していただろうね。でも決勝戦の興奮状態で、ケガのことなんて考える余裕すらなかったよ」

キャプテンのデビッド・カークが

すると抜け出したのをサポートし、ウエイン・シェルフ・オードからのパスを受け取るや否や、35歳も突破して挙げたカーワンのトライを見て、いったい誰がヒザの故障に気がついたろう。

「決勝戦の終わったあとは痛みがさらにひどくなった。試合を続けたこ

話 秘 手 選

第1回ワールドカップで、190キ、90キという恵まれた体格をいかし、パワフルな突進でグラウンドを縦横に走り回って最多の6トライを奪い、NZ優勝の大きな原動力となった。その爆発的なスピードから「怪物」という異名をとり、名実ともに世界ナンバーワンのWTBとして、揺るぎない地位を手に入れた。

世界の頂点を極めた怪物

ジョン・カーワン(NZ)

★ 特別版 ★



とで、悪化したんだと思うよ……。
だけど、カップを手にかけることができたんだから、それはそれで価値あることなんだ」

今大会によって、カーワンはその類まれなBKとしての素質を全世界に焼きつけた。が同時に、決勝戦後の彼の体にもまた、無数の痕跡が残った。ヒザの故障で足をひきずるだけではなく、脊椎が曲がっており、それが原因で背中もひどく痛む。

「脊椎の故障はカレッジの5年生のときにさかのぼるんだ。その年、僕の背丈は1年間で30センチも伸びた。それ以来、背中具合は悪いんだ」

ワールドカップ制覇の興奮も覚めぬうちから、カーワン（彼は今年の12月でようやく23歳になる）は、1日2回物理療法士のもとに通って背中とヒザの治療を受け続けている。

それだけに、ドメインの第3競技場の泥の海の中で動き続けられたということは、彼としても満足いくものだった。

「いつもは『ボールを寄せ』って感じてやってるんだけど、先週の土曜日みたいに、ちがったプレーもできることがわかったよ」

カーワンは1983年、オークランドのコーチであり、現在オールブラックスのセレクトターとして最も発言力を持つジョン・ハートに見出されたことにより、現在のスーパースターへの道を歩み始めた。

18歳以下が在籍する、マリスタ・クラブの第3グレードにいたカーワンの天才を見抜いたハートは、彼を

いきなりオークランド代表チームに入れた。ハートの眼は確かだった。わ

●ラガーマンだらけのカーワン一家

カーワンの天性は、血筋に負うところが大きい。
彼の祖父のジャックは1924年、CTBとしてオークランド代表に選ばれ、9試合に出場している。しかし、金銭問題でオークランド・ラグビー協会ともめて協会を脱退させなければ、当然もっと多くの試合に出場していたにちがいない選手だった。

ジャック・カーワンはキーウイスに参加、1926年には、リーグのツアードイギリスへ遠征している。父のパットと叔父のファジーもともにオークランド・リーグの代表として活躍している。そんな中で、幼いジョンも、5歳からラグビーを始めている。

こうしたカーワン家のスポーツ環境の中で育ったジョンだが、父親からはリーグの話ばかりを聞かされた。しかし彼の母親は逆に協会のことを話して聞かせた。

「母はラグビー一家の出なんだ。母の叔父のテッド・ヘッジはオークランド代表として'80年代に15試合に出場して、オールブラックスの候補になったこともあったんだ」

ほかにもジョンの3人の姉たちもネットボールをやっていたし、まさにスポーツ一家。土曜日ともなる

と、父親は幼いジョンをラグビー（あるいはリーグ）に連れていき、母親

ずか22歳にしてカーワンは、衆知のとおり大スターとなったのである。

はネットボールへ行く、という生活だった。

リーグからの影響が強かったにもかかわらず、彼はいつでもオールブラックスに憧れていた。が、15歳になるまでは体もそう大きくなく、そんな憧れも現実的なものではなかったようである。

ところが15歳を過ぎると、彼の体はみるみる大きくなっていった。そして、セイクリッド・ハート・カレッジの5学年のときの1980年、ついに彼はセレクトジョンに入ったの

だった。しかもそれは、HB、ゴールキッカーとしてだ。あの90kgの体で彼の勇姿を見たあとでは、にわかには信じがたいことだが、'80年の当初はHBのような体つきだったとしても、シーズンの終わりには、彼はもはやHBではなくなっていた。先に彼の言った、1年に30センチも背が伸びたというのは、まさにこの年である。

「2年目のシーズンが終わるころまでには、ロックに転向しようかと思うくらいになっていったよ」

カレッジを卒業した彼は、大学に行くつもりも、会社勤めするつもりもなかったようだ。彼は父親の経営する精肉店で働いていた。

そんな彼に、なかなかチャンスは訪れはしなかった。彼も、彼の家族の誰もが、もっとずっと早く、彼にスターのおはちが回ってくると思

っていたのだが。'81年に彼は、カトリック系の団体がつくるマリスタ・クラブに加入した。この第5グレードのチームではCTBとしてプレーしたが、時おりWTBとしてゲ

ームに出てもいる。この時が、彼が天職のWTBを手がけた最初だった。

彼はこのポジションで、あつという間に実力を発揮、見る間にチームのトライゲッターへと成長していった。そして、オークランドの18歳以下チームの代表の座を獲得する。

翌年、彼はWTBとして第3グレードのチームに進んだ。ここでもいきなりトライゲッターとなった彼は、カレッジ卒業後の沈滞から、ようやく立ち直ったのである。

'82年にもまた、オークランドの第3グレードチームの代表に選ばれたが、彼は自分がとくに優れたプレーヤーだとは思っていなかった。ただ単に、トライを挙げる機会が多く、そして長いPGを決められるだけの器用なプレーヤーのひとりしか考えていなかった。

'83年のシーズンが始まると、マリスタ・クラブの代表チームの監督がカーワンを彼のチームに引き揚げようとした。ところがカーワンは、19歳以下のチームで、もっと自分の実力と自信を養いたいという理由で、断わっている。

そして、ほかにも彼に注目している者がいて、オークランド・パバーリアンズに招かれたのである。カーワンがこれを受け、チームに入るや、たちまちチームのスターたちと肩を並べる実力を発揮したのである。

ある時ゲームのあとで、オークランドの監督ジョン・ハートが彼の父親に何か話しているのにカーワンは気がついて、その時は別に気に

イラスト・笠松 洋



もめていなかった。ところがその翌週、ハートが再びやって来て、ヒルスローとの試合を見ていった時、今度はハートの動向が非常に気になったという。

「誰かが、ハートが来ていることを知って動揺していた。とにかく硬くなってミスばかりくり返していたよ。彼は途中で引きあげたんだけど、その2分後さ、僕がその日唯一のトライを挙げたのは」

「いずれにしても、彼の眼になんかたにちがいないんだ。彼は電話で僕を代表チームに誘ったんだから。ハートイ（ハート）と僕の父と僕の3人

●州代表から //世界の右WTBへ

カーワンのデビューは、イーデンパークで行われたオークランド協会の百周年記念試合だった。この試合で上々の出来具合を見せたカーワンは、対ブリティッシュ・ライオンズ遠征のメンバーに抜擢された。

ライオンズ戦は13-12という紙一重のスコアで勝利を収め、彼自身も初めてプレーヤーとしての才能に気づいたというように、ディフェンスにおいて英雄的大活躍を見せた。

ライオンズのCTB、クリープ・ウッドワードが、オークランドのゴール内に蹴りこんだボールを押えようとした時、カーワンは先に飛びこんで、危うく難を逃れたのだ。

「その前にバントをこぼしていたからね、その失敗は絶対に取り返してやろうと思っていたんだ。もうルーすれすれのところでボールに向か

で2回ほど会って話をした。最初、やっぱりちょっとためらいはあった。特に父の方はそうだった。でも、メリットを考えたならね。で、それを受けることにしたんだ」

こうしてオークランド代表となったカーワンだが、このオークランド代表での最初のトレーニングのことは決して忘れられないだろうと語っている。

「控室に座っていたんだけど、隣にはアンディ・ヘイデンがいたんだ。彼は僕が6歳の頃からやっているスターだぜ！ もうドキドキ、あがり放しだったよ、ホントに」

っていつて、肩でウッドワードを押しのけるようにしてボールに飛びこんだんだよ。平たく言えば、僕の当たりで彼はフツ飛んでしまったんだよ」

大観衆の前での初めての試合だったこともあってか、彼はその場面を克明に覚えている。「観客の声はもの凄かったよ。ほんといい日だった」

カーワンはこのシーズン、7トライを挙げ、それが今日までオークランド代表として57回出場し、40トライを挙げるスクートとなった。

その多くのトライのいくつかは、世界でも指折りの競技場であるイーデンパークで見られたが、ワールドカップの初戦、イタリア戦でみせた信じられないような90分独走トライは、誰の眼にも印象に残るものだら



怪物、カーワンも、決してすべてが順調だったわけではなかった

う。まさに「J・K」の真骨頂といえる。

そして、'83年のシーズンの終わりを飾るイングランド、スコットランド遠征には、もう当然の如くNZ代表に選ばれるようになっていた。

そしていよいよ、'84年、彼のテストマッチ・デビューが訪れる。クライストチャーチで行われたフランス戦だ。このフランス戦のあと、カーワンはオールブラックスの一員としてオーストラリアに遠征するが、こ

こでの最初の試合で彼は肩を肩折してしまった。

この試合は、コンコード・オーバールで行われたニュー・サウスウェールズ戦で、カーワンはこの結果スチール製のピンで腕を固定しておかねばならず、'84年のシーズン終了まで、彼のこの状態は続いたのだ。

彼をこの悲劇に陥れたプレーヤーはマット・パーク。以後、パークはワラビーズのスターとなり、同時にカーワンの宿敵となった。

「あんなこんなことでカーワンはパークを恨みに思っではいない。が、どうしてもそのことを結びつけられて大げさに因縁対決を煽り立てられてしまうのも世の常だろう」

今回ヒザを故障するまでは、この肩の肩折がカーワンの唯一の大きな故障だった。

もちろんカーワンほどの男にも、相手に危惧を覚えることはある。「そりゃそうだよ。僕は必ず家で対戦相手の研究を十分にやる。ビデオはいくらと教えてくれるし、それで足りなきゃ、誰にだって聞いて回るよ。僕はオークランド代表のデビュー戦でオタゴのラルフ・ミルンを

マークしたんだ。彼は内側にカットインしてくるって聞いてはいたんだけど、そのとおりやられても僕には彼を止められなかったよ」

しかし、あの天才的な動きは、そんな努力の中から生まれたのではないようだ。

「ほとんどは天性のものだと思う。たとえば、あんな90分独走トライなんてことが、どうしてできるのか、ちょっと説明できないもの。僕にとってトライっていうのは、ボールを受けた次の瞬間には、もう相手のゴールにボールをつけてる、そんな感じのものなんだ」

「僕が練習して得たものといえば、サイドステップだね。あと、最初僕はキックが弱かったんだ。だからこれは一生懸命練習したよ。でも、そのほかのことは、特別力を入れて取り組んだことはない」

父親の会社を離れたあと、彼はクルマのセールス会社に勤務し、そのチームに加え、今はフォーザという広告会社のプロモーション・マネジャーの地位にある。

22歳にして国民的英雄。彼の元へは1日に何ダースという単位でファンレターが届く。

果たしてそんなスーパースター、カーワンが、今年10月の日本遠征に参加してくれるのかどうか定かではない。

「是非とも参加してみたいとは思っているしね。遠征にはもってこいの地だよ、日本は」